

図1-11 S恋人最高値(平均値1.4)

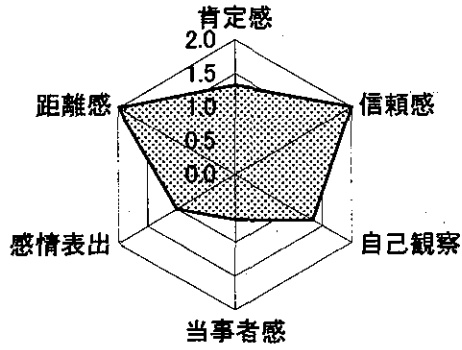


図1-12 S自分最高値(平均値1.6)

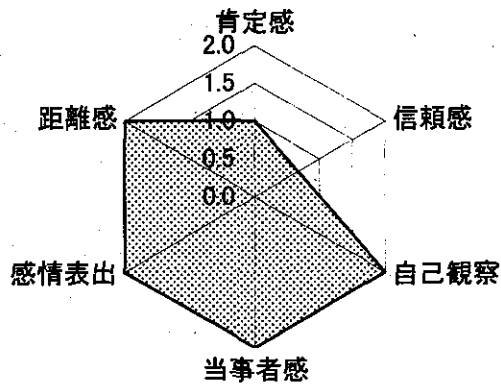


図1-13 S友達総平均(平均値1.2)とS恋人・自分最高値の対象者の友達の値(平均値1.3)との比較

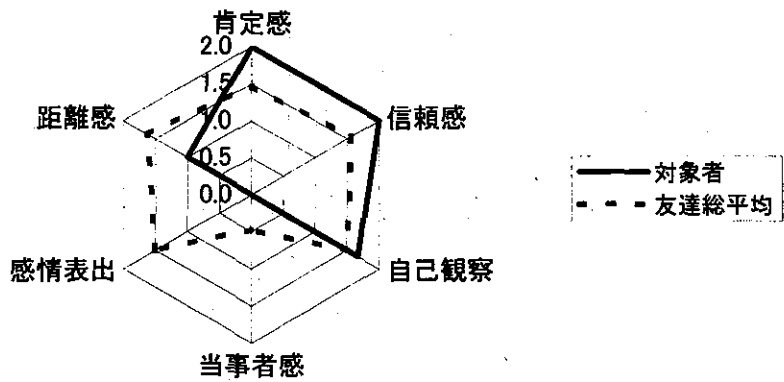


圖1-14 總平均比較(S·D)

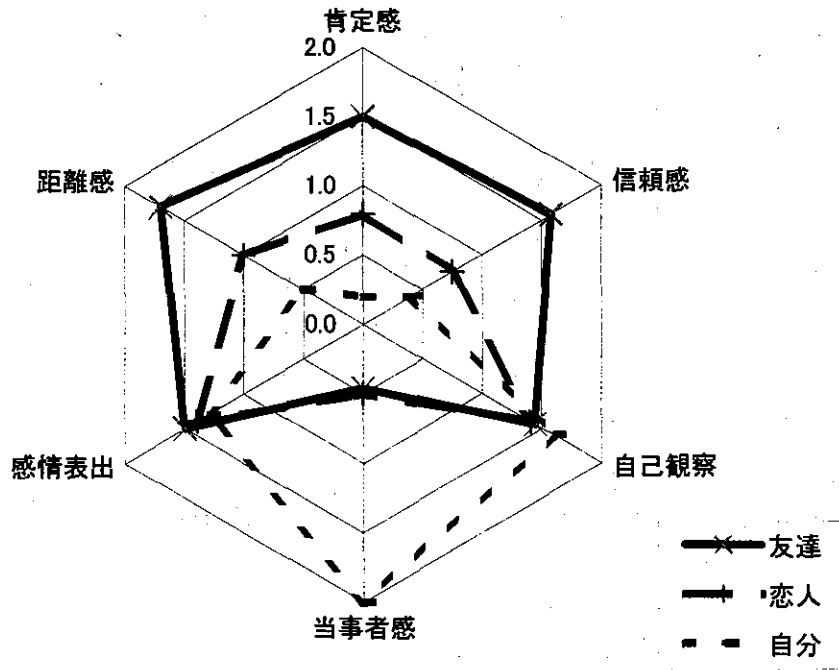


図1-15 S友達最低値(平均値0.3)

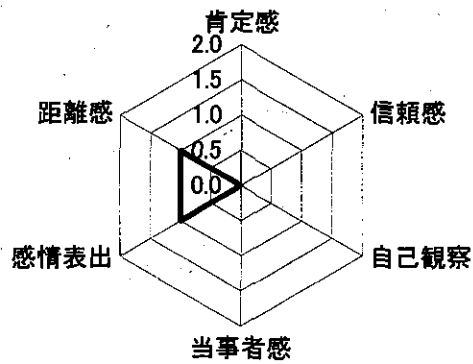


図1-16 S自分最低値(平均値0.2)

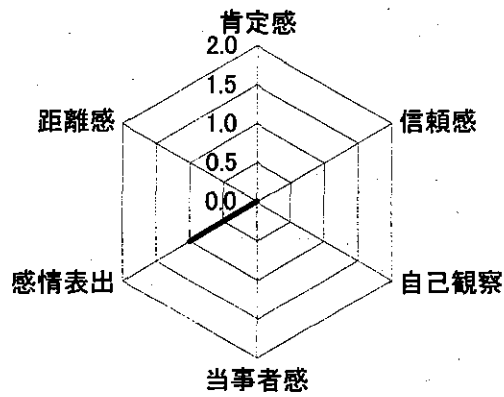


図1-17 恋人総平均・S恋人最低値と S友達・自分最低値の対象者の値との比較

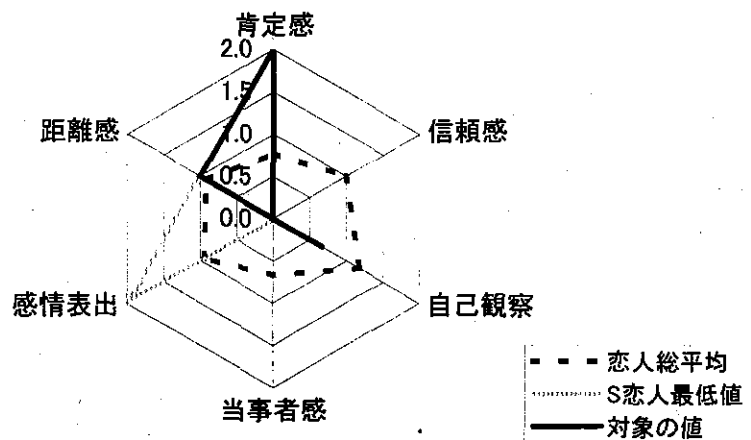


図1-18 友達総平均
(平均値1.2)と
S恋人最低値(平均値0.8)の対象
者の友達の値の比較①

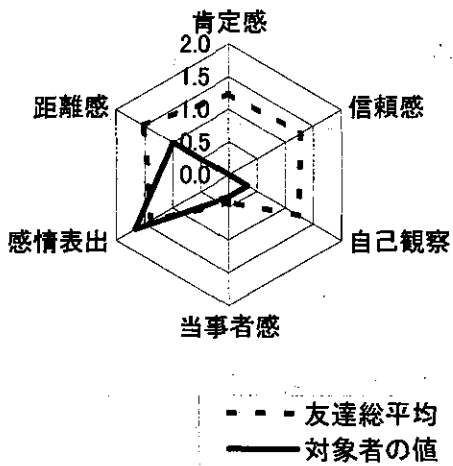


図1-19 友達総平均
(平均値1.2)と
S恋人最低値(平均値0.8)の対象
者の友達の値の比較②

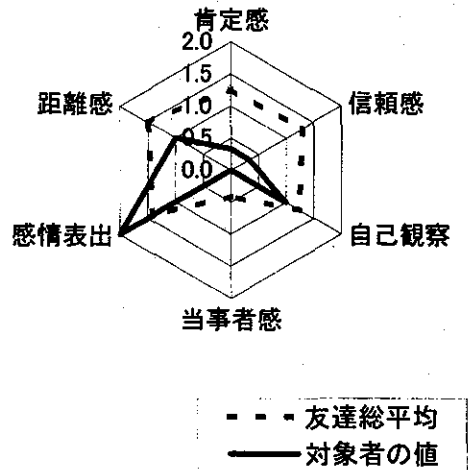


図1-20 自分総平均
(平均値1.1)と
S恋人最低値(平均値0.2)の対象
者の自分の値の比較①

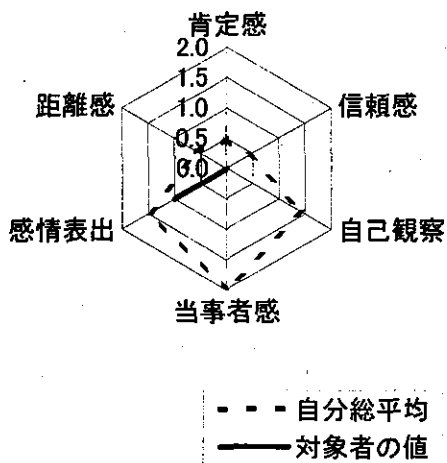


図1-21 自分総平均
(平均値1.1)と
S恋人最低値(平均値0.2)の対象
者の自分の値の比較②

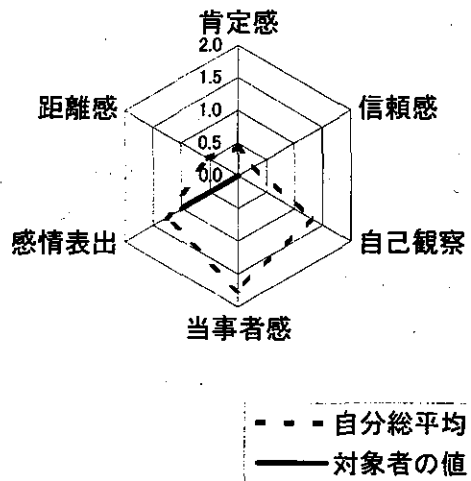


图2-1 前A友達平均值

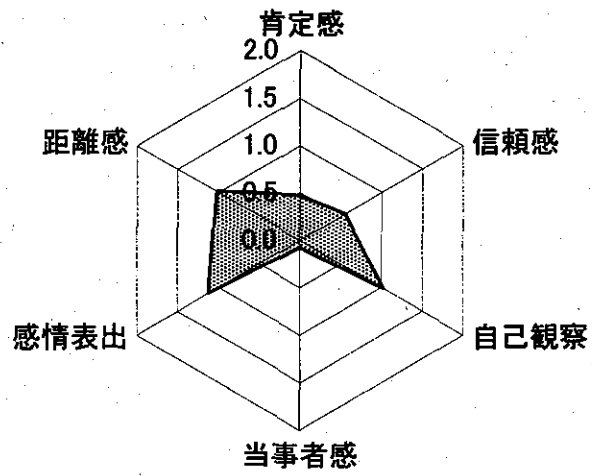


图2-2 前A恋人平均值

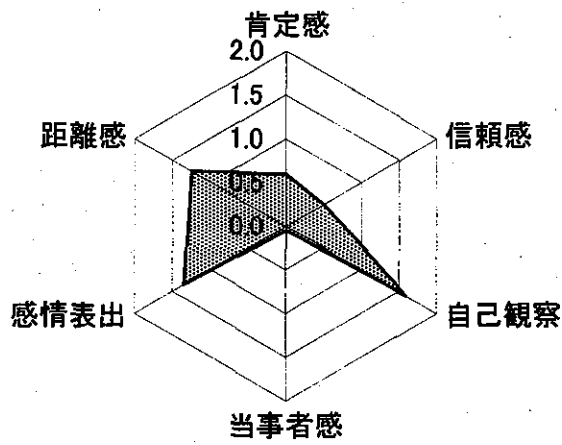


图2-3 前A自分平均值

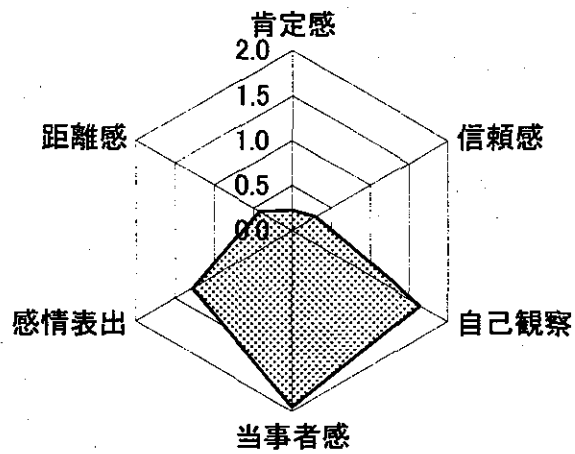


图2-4 後A友達平均值

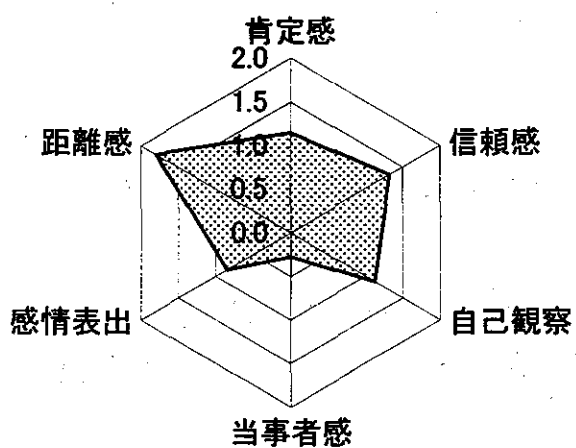


图2-5 後A恋人平均值

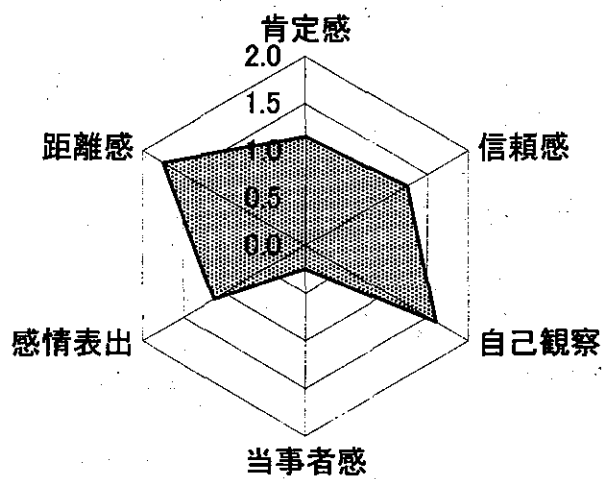


图2-6 後A自分平均值

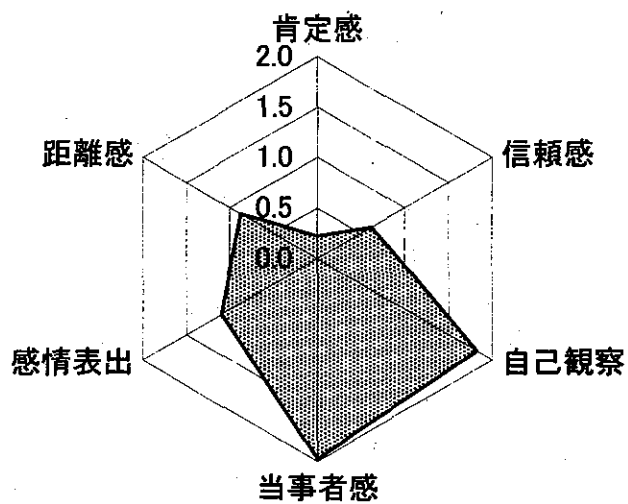


图2-7 A友達平均值

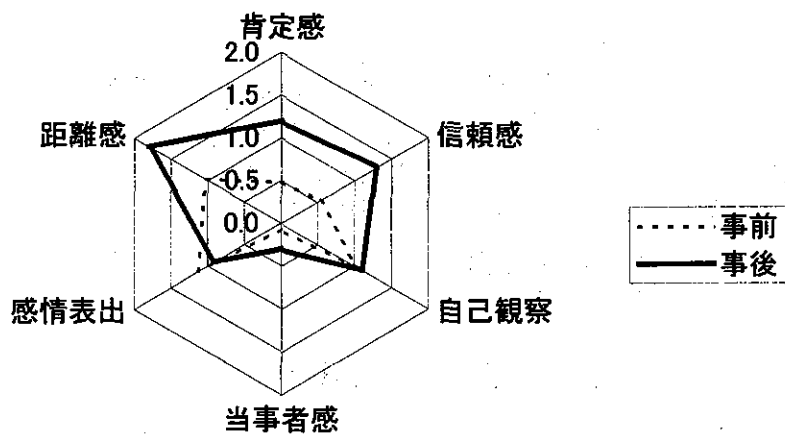


图2-8 A恋人平均值

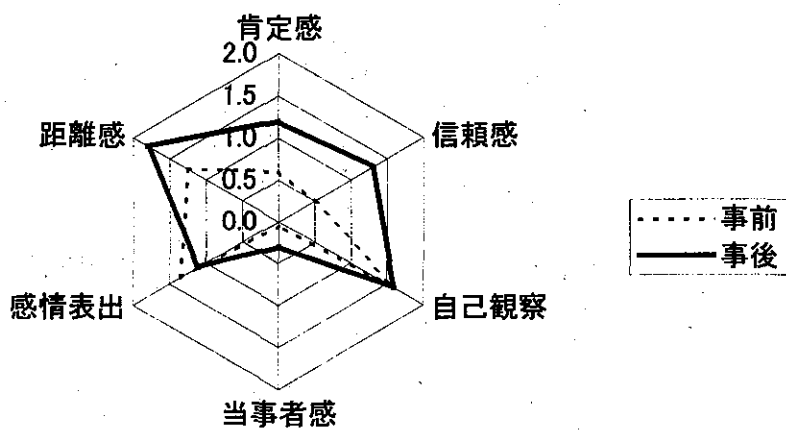


图2-9 A自分平均值

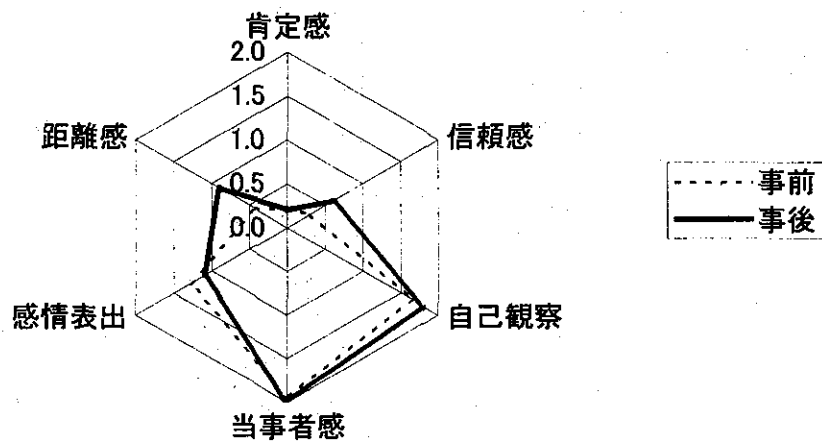


图2-10 前B友達平均值

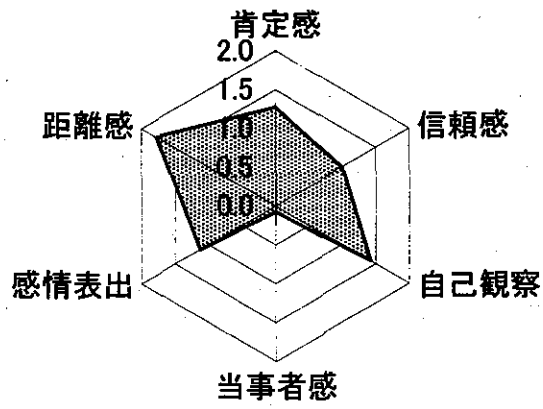


图2-11 前B恋人平均值

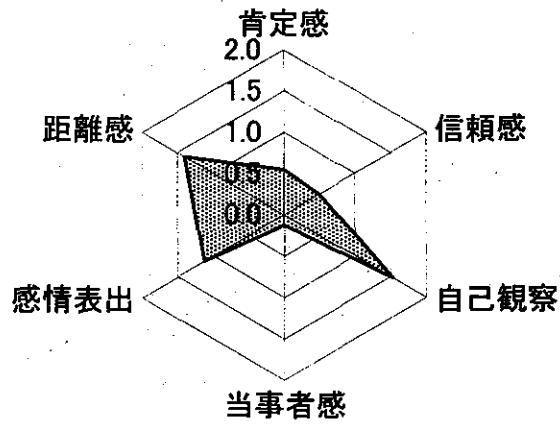


图2-12 前B自分平均值

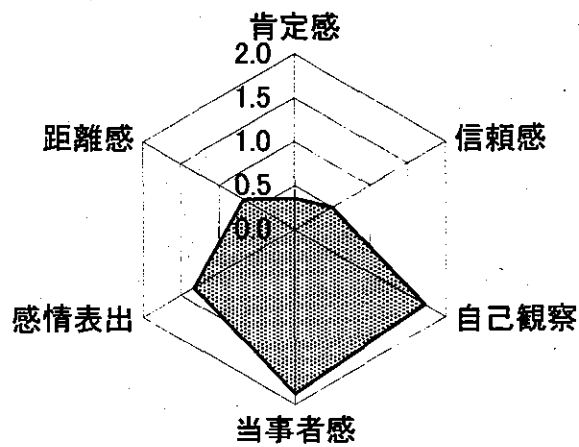


圖2-13 後B友達平均值

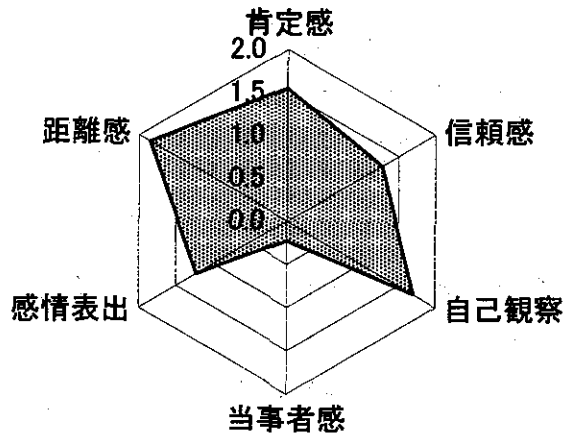


圖2-14 後B恋人平均值

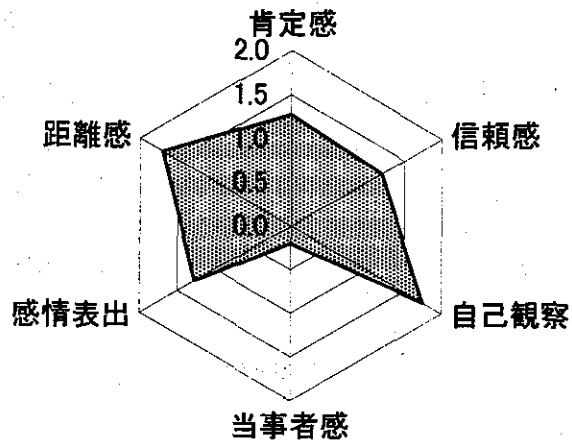


圖2-15 後B自分平均值

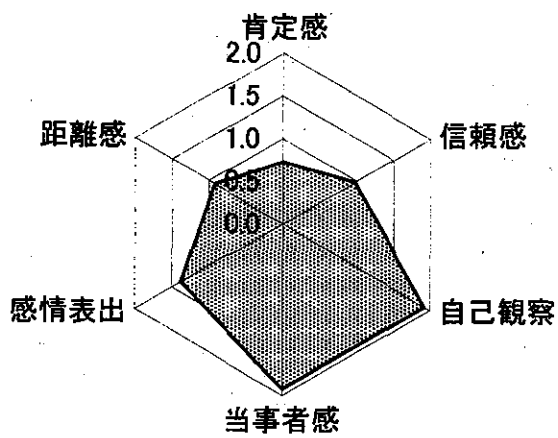


图2-16 B友達平均值

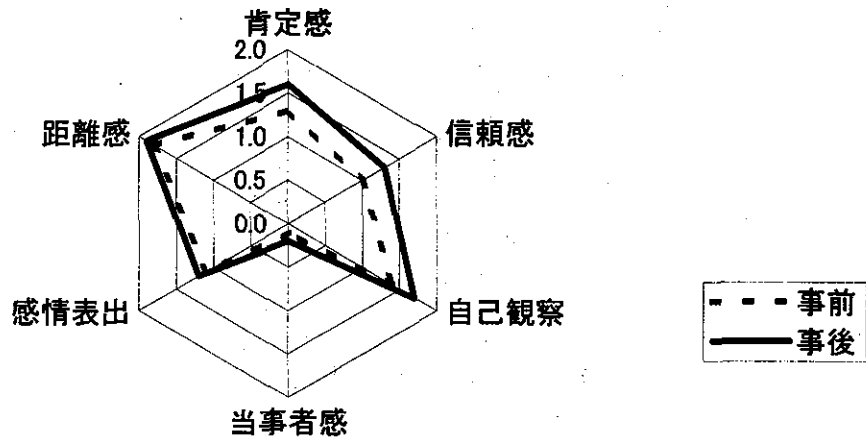


图2-17 B恋人平均值

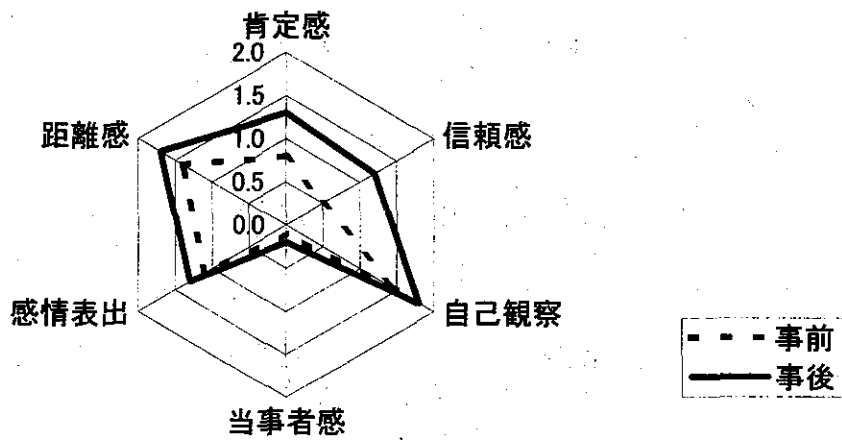


图2-18 B自分平均值

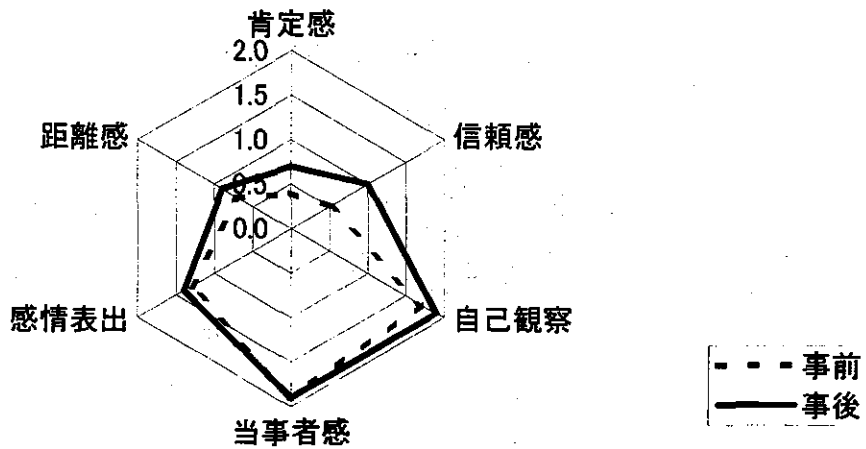


圖2-19 前A綜合平均值

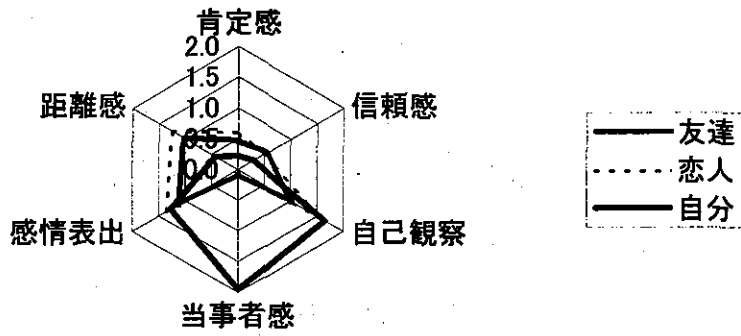


圖2-20 後A綜合平均值

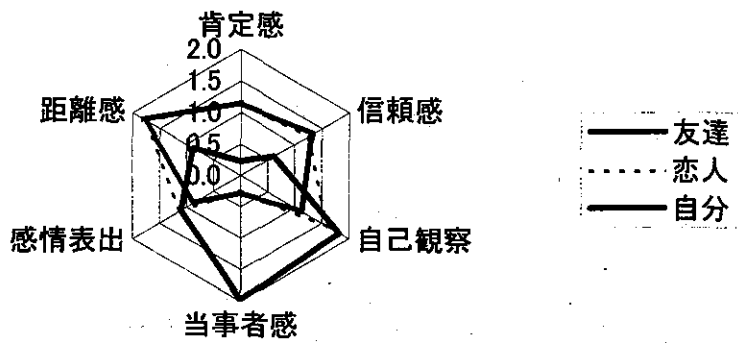


圖2-21 前B綜合平均值

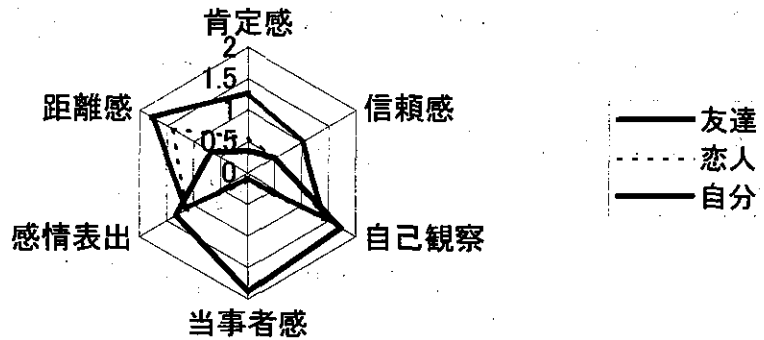
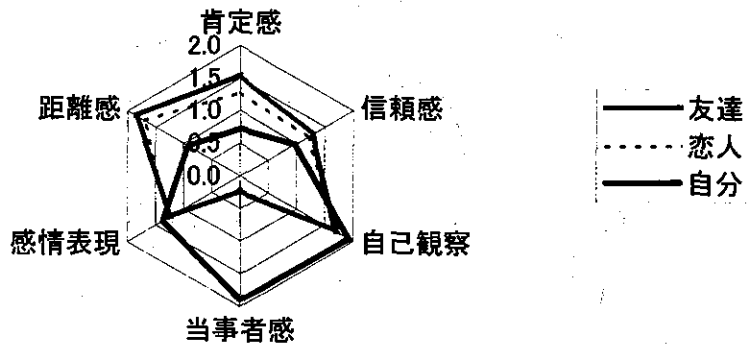


圖2-22 後B綜合平均值



友達のワークの例

これからどんな風に接したらいいかな。

言ってくれたのは
きっと自分を信頼してくれたってことだから
うれしい。

驚く。

相談にのる。

不安・・・だけどうれしい。

言ってくれてありがとう。

一緒に病院についていく。

一緒に AIDS のことについて勉強する

何でも言ってい
よ。

別に今までと変わらな
いよ。

体調大丈夫？



©HIVと人権・情報センター

自分の AIDS について知っていることをみんな伝えてあげる。

少しよそよそしくなってしまうかも。

恋人のワークの例

泣く。

そんなこと関係ないよ。

どこから感染したの……。

浮気したに違いない。

怒る。

ずっとそばにいるよ。

SEXするのは抵抗がある。

少しの間距離を置く。

私も感染してるかも……。



©HIVと人権・情報センター

付き合いは続けていくけど、
子どもが欲しいから結婚はできない。

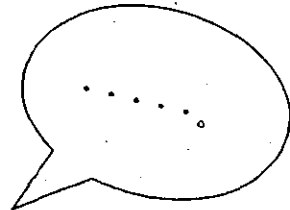
相手が感染していたら最初は不安だったり、
怒ってしまったりするかもしれないけど、
自分もたくさん AIDS について知って
助けられるようにする。

自分のワークの例

表面は笑って、今までどおり過ごす。でも誰にも言えない。



パニックになる。



もう恋人はつけれない。

他の人に知られたらうわさになったり、差別を受けたりする。それが怖い。

自分の殻に閉じこもる。

誰にも会わない。

親に申し訳ない。



将来がまっくら。

©HIVと人権・情報センター

最初は落ち込むけど、病院に行って生きていくことを考える。

信頼している人たちだけには伝える。他の人には言わない。

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書

NGOと教育・保健機関等の連携による若者相互の予防啓発プログラム

(YYSP) におけるワークショップの効果に関する研究 その2

生活環境、生活スキルと共生ワークの効果

主任研究者：五島真理為	(特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター 理事長)
分担研究者：伊藤葉子	(中央大学社会学部 講師)
尾澤るみ子	(箕面市立第一中学校 教諭)
新庄文明	(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授)
竹内幸延	(大阪市立鯉江東小学校 教諭)
中瀬克巳	(岡山市保健所 所長)
橋谷毅	(日本赤十字愛知短期大学 教授)
守山正樹	(福岡大学学部 教授)
山本勉	(岡山県立大学短期大学部 教授)
研究協力者：阿部ののぶ	(特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター インターン)
伊藤麻里子	((財)エイズ予防財団 リサーチレジデント)
大郷宏基	(特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター 中部支部)
川辺伊公子	(四日市保健所 保健師)
栗原喜代子	(桑名保健所 保健師)
小林和子	(岡山市保健所 保健師)
山本昌代	(新宮保健所 保健師)
横山尚子	(平群町立平群南小学校 養護教諭)

研究要旨

YYSP に参加する対象者の生活環境や生活スキルとの関係に着目して、共生ワークの前後の変化について比較・検討を行ったところ、生活環境や生活スキルと共生ワークを含めたYYSPの効果との顕著な関係は示されなかった。地域や学校、家庭などの場での生活スキルや現在おかれている生活環境によって、NGOが行う若者への啓発プログラム実施の効果が大きく左右されるということはないと考えられる。以上の結果を踏まえ、今後はどんな若者に対しても効果的な啓発プログラムを総合的に作成・実施していくことがより必要であると考えられる。

A. 研究目的

近年、UNAIDSも我が国における若者の感染拡大を危惧しているおり、このような状況のなか、医学予防と人権啓発を関連機関が協働して行うことによってより施策が効果的に進むことが期待される。ピアプレッシャーを効果的に取り入れる若者相互の啓発方法としてのピアエデュケーションの効果は世界的にも認められているものである。本研究では、HIVの感予防及び人権に関する啓発を国民的レベルですすめるために、NGO・保健所・教育機関の連携のもとに行われる若者相互の啓発プログラムYYSPの評価方法について検討した。

若者相互の啓発プログラムYYSP（以下YYSPとする）はひとつの決まったプログラムではなく、それぞれの地域や学校など対象グループの環境やニーズを考慮しながら毎回オーダーメイドでプログラムを計画・実施している。行政や教育機関との連携を取りながらYYSPを実施していくなかで、それぞれの地域や学校によって大きく異なった要望・意向を頂くことが多い。それらの要望・意向の違いは、ほとんどが対象者それぞれの生活環境の違いや、地域の雰囲気、学校や家庭の方針による違いを考慮した結果である。ある程度のグループに対して行うYYSPのなかで、対象者の個別的な生活環境やそのなかで会得した生活スキルの違いはプログラムの効果にどのように影響してくるのか。

本研究では生活環境や生活スキルとの関係性について考察する。YYSPに参加する対象に生活についてアンケートを実施し、同じ対象の事前・事後の共生ワークの変化との比較・検討を行った。

B. 研究方法

a. 対象

2004年度にYYSPで共生ワークを実施した大学1校を対象とした。対象人数は40人で、A・Bという2つのグループに分けた。

b. 調査方法

YYSPの最初に、生活アンケートとして自己肯定感、人との関係性、生活自立などについての20項目の質問表を渡し、最後に回収した。

共生ワークは、友達・恋人・自分のワークを事前・事後の2回行い、比較を行った。事前は、YYSPを行う以前に共生ワークのみを行ったものである。事後は、YYSPの一環として知識・認識・共生などについての講話を行った後、実施したものである。

Aグループには以上のように調査を行った。BグループにはYYSPのなかで感染者と出会う機会を設け、その後事後の共生ワークを行った。

(1) 生活アンケート

生活アンケートの項目は以下の20項目である。

- a 自分自身のことが好きである。
- b 家族から大切にされていると思う。
- c 自分の体で好きなどころがある。
- d 思ったとおりにならないと何かにあたってしまう。
- e 自分自身をはげましたり、なぐさめたりしたことがある。
- f 中学校時代に家族とよく話をした。
- g 自分の話を信頼して聞いてくれる友だちがいる。
- h 知らない人に道を聞くことができる。
- i 電車内などで人に席をゆずったことがある。
- j 小、中学校で楽しく過ごせたクラスがあった。
- k 家族以外の赤ちゃんを抱っこしたことがある。

- l 朝食を毎日食べている。
- m 食事のすききらいは、ほとんどない。
- n 睡眠時間は、ほとんど6時間以上とっている。
- o 朝晩の歯みがきは、必ずしている。
- p 小学生のころ、1日3時間以上テレビゲームをしている。
- q 料理を作って、人に食べさせたことがある。
- r 洗濯機を使うことができる。
- s ごみを決められたルールにしたがって出したことがある。
- t 近所の人に会ったら、あいさつをしている。

以上20項目を、自己肯定(a~e)、他者への信頼感(f,g,j)、他者との距離感(h,i,k)、日常生活自立(l,n,o,r)、嗜好(m,p)、社会性(q,s,s t)の6つのカテゴリーに分類した。

(2) 共生ワーク

共生ワークとは感染者を具体的にイメージすることによって、感染していると想定する相手の立場になって考え、「共感」する気持ちを育むことを目的としたワークである。①友達に感染していることを打ち明けられたら自分はどうか、どう行動するか②恋人が感染していることを知ったら自分はどうか、どう行動する

か③自分が感染していることを知ったら自分はどうか、どう行動するか、の3つのパターンで、人型の書いてあるワークシートに文字や絵など自由に書いてもらった。

共生ワークは、若者相互の予防啓発プログラムYYSPの一環として行われているので、ワークの前に知識・認識・共生などについては講話を行っている。そして、教材などを使って感染者のことを具体的に考えられるようにしている。

共生ワークのワークシートから読み取れる「共感」の内容を6つのカテゴリーに分けた。

- ① 友達・恋人：相手のつらさや大変さを受け止めているか 自分：自分を受け止めているか
- ② 友達・恋人：相手が信頼して打ち明けてくれたことに対して感謝や喜び等の気持ちがあるか 自分：自分への信頼感が揺らがないか、自分への信頼感をもって他者への信頼感を持っているか
- ③ 自分の気持ち、行動を客観的に観察しているか
- ④ 友達・恋人：相手の立場、当事者の立場を自分に置き換えて考えているか 自分：自分が感染者としての立場で考えられているか
- ⑤ 知ったときの自分の感情をワークシートにどれだけ表出しているか
- ⑥ 友達・恋人：相手との距離感、今まで通り・少し距離をとる・離れる 自分：感染を知

	①肯定感	②信頼感	③自己観察	④当事者感	⑤感情表出	⑥他者との距離感
友達	友達への肯定感	友達への信頼感	自分自身	友達の立場	自分の感情表出	友達との距離感
恋人	恋人への肯定感	恋人への信頼感	自分自身	恋人の立場	自分の感情表出	恋人との距離感
自分	自己肯定感	自己信頼感	自分自身	自分の立場	自分の感情表出	周りとの距離感

ったときの周りの人間との距離感、今まで
通り・少し距離をとる・離れる

(3) 分析方法

1. 生活アンケート、共生ワーク共に、各カテゴリーの合計の平均をとり平均値とする。
2. 生活アンケート、共生ワーク共に、最高値・最低値は6つのカテゴリーの点数の合計が最も高かった対象者、最も低かった対象者の値である。同じ合計数の対象者が複数いる場合はそれぞれを最高値・最低値とした。そのため、各カテゴリーによって、最高値・最低値の人数が違う場合がある。
3. 生活アンケート・共生ワークの結果との比較・検討を行った。分析はすべてエクセルで行っている。

C. 研究結果

1. 生活アンケートのA・Bグループ比較

カテゴリー分け前の結果を各項目ごとに比較検討したが、大きな差異は見られなかった。(図 3-Aa~3-Bt)

AグループとBグループのカテゴリー分け後の平均値を比較してみても、若干Bグループが高いものの大きな違いは見られない。生活アンケートにおいて、両グループの差異はほぼないと言える。(図 3-1)

2. 共生ワークから見た生活アンケート・共生ワークの比較・検討

Aグループ・Bグループ共に、共生ワークの事前総合・事後総合で数値が高かった・低かった対象者、事前・事後で数値の上昇が高かった・低かった対象者を抽出し、生活アンケートとの比較・検討を行ったが、大きな差異は見られなかった。

Aグループ:

事前総合：高い：⑧⑪⑫ 低い：⑳⑤

事後総合：高い：①④⑬ 低い：③⑥⑧

上昇：高い：⑫⑬⑤ 低い：⑤⑥⑪

Bグループ:

事前総合：高い：⑦⑨ 低い：⑮⑳

事後総合：高い：⑮⑦⑨ 低い：⑩⑳

上昇：高い：①⑤⑧⑭⑮⑱ 低い：③⑬

(表 3-1,3-2 参照)

3. 生活アンケートから見た生活アンケート・共生ワークの比較・検討

(1) Aグループ

生活アンケートにおける自己肯定感の数値が高い上位4人は、社会性の上位4人を同じ対象者であった。自分の共生ワークでは、平均値(図 3-2)と比べ、信頼感の上昇が見られる対象者が多かった。(表 3-3,図 3-5a~3-5d) 友達・恋人の共生ワークでは、4人中3人が事後の距離感が最高値の2に上がった。(表 3-4,3-5,図 3-2,3-3,3-6a~3-7d)

生活アンケートにおける他者への信頼感では、平均値と比較し数値のかなり低かった2人が事前の友達・恋人の共生ワークで信頼感の値が0であり、生活アンケートとの関連性が見られた。この2人においては、事後でも友達・恋人の共生ワークで信頼感の値は0のままであった。(表 3-6,3-7,図 3-2,3-3,3-8a~3-9b)

生活アンケートにおける他者との距離感では、最高値の2人は事前の友達・恋人の共生ワークの段階から距離感の値が高く、事後には最高値2へ上がった。(表 3-8,3-7-9,図 3-2,3-3,3-10a~3-11b)

生活アンケートにおける日常生活自立、嗜好では大きな特徴は見られなかった。(表 3-10~3-21)

(2) Bグループ

生活アンケートにおける自己肯定感の数値が高い対象者は、Aグループと違い自分の共生ワークで信頼感の上昇はそれほど見られなかったが、これは事前の時点で数値が高かったためだ

と考えられる。Bグループでは肯定感の上昇も見られた。(表 3-22,図 3-12,3-15 a~3-5c)

生活アンケートにおける他者への信頼感では、数値が低かった5人中4人は事前の友達・恋人の共生ワークの信頼感でも0.5以下と低い値であったが、事後では事前で最高値の一人を除いて友達・恋人ともに0.5~1.5の上昇が見られた。これはAグループとは違う傾向である。(表 3-23,3-24,図 3-13,3-14,3-16a~3-17e)

生活アンケートにおける他者との距離感では、数値の高かった5人は事前の友達のワークの距離感で全員が最高値の2、恋人の共生ワークでも高い値になっている。Aグループと同様に事前の段階で距離感の値が高いという傾向が見られる。(表 3-25,3-26,図 3-18a~3-19e) この5人の事後の自分の共生ワークでは、6つのカテゴリーの合計でほとんどの対象者に上昇が見られた。平均の上昇値が1.3なのに対し、5.5、3.0、0.0、2.5、2.0と5人中4人に平均以上の伸びが見られた。(表 3-27,図 3-20a~3-20e)

生活アンケートにおける関連性であるが、社会性で最高値3の3人は、Aグループのように自己肯定感との関係性は見られなかった。しかし、3人中2人は他者への信頼感・他者との距離感の両方で高い値の対象者に含まれていた。

(表 3-2) 事前の友達のワークでの肯定感では3人中2人が最高値2、距離感では友達・恋人共に全員が2であった。友達のワークで肯定感が2でなかった対象者も、事後には2に上昇した。(表 3-28,3-29,図 3-21a~3-22c) 自分のワークでは、肯定感・信頼感で大きな上昇が見られ、事後では3人中2人が値が2になった。距離感に事前事後の変化は見られなかったが、3人中2人が事前の時点で最高値の2であり、1人も平均以上であった。(表 3-30)

生活アンケートにおける日常生活自立、嗜好ではAグループ同様大きな特徴は見られなかった。(表 3-31~3-42)

D. 考 察

共生ワークの数値が高い・低いなどの顕著な者を対象に、共生ワークと生活アンケートを比較してみたが、大きな違いは見られなかった。

生活アンケートにおいて、各カテゴリーごとに数値の顕著な者を対象に、生活アンケートと共生ワークの比較を行った。

自己肯定感が高かった対象者が必ずしも事前に行った自分の共生ワークで肯定感が高いということにはなかった。これは、自分の共生ワークにおける「肯定感」と生活アンケートにおける「自己肯定感」がイコールではないということである。(図 3-23~3-25)

生活アンケートでの「自己肯定感」は現在の自分への肯定感、自分の共生ワークでの「肯定感」はHIVに感染した自分への肯定感であり、自分とHIV/AIDS両方への肯定感の値が含まれていることが考えられる。

他社への信頼感では、特にAグループで、他者への信頼感が低い対象者は事前の友達・恋人の共生ワークでも信頼感があまり高くないという結果が得られた。(図 3-26~3-31) Aグループでは事後でも信頼感に上昇は見られなかったが、Bグループでは上昇が見られた。(図 3-32,3-33)

他者との距離感では、数値のかなり高い対象者は、Aグループ・Bグループ共に事前の友達・恋人の共生ワークでも比較的距離感が高いという結果が得られた。(図 3-34~3-39)

社会性では、高い値を出した対象者は、Bグループでは事前の友達・恋人の共生ワークで距離感が最高値の2であった。事後では友達の共生ワークの肯定感も最高値になった。Aグループでも、友達・恋人の共生ワークで事後最高値になった対象者がほとんどであった。(図 3-40~3-42)

自分の共生ワークでは、Aグループ・Bグループ共に信頼感で事前の時点から数値が高いか、

上昇が見られた。Bグループでは肯定感の上昇も見られた。(図3-43,3-44)

AグループとBグループの間にも、著しい差はなかった。

このように、生活アンケートと共生ワークの関係性は多少は見られたものの、大きなものではなかった。

E. 結論

生活環境や生活スキルと共生ワークを含めたY Y S Pの効果との大きな関係性は、本研究では示唆されなかった。地域や学校、家庭などの場での生活スキルや現在おかれている生活環境によって、NGOが行う若者への啓発プログラム実施の効果が大きく左右されるということはないと考えられる。

以上の結果を踏まえ、今後はどんな若者に対しても効果的な啓発プログラムを総合的に作成・実施していくことがより必要であると考えられる。

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

○ 五島真理為：トレーニングされたボランティアの力を最大限に活用。社会運動，市民セクター政策機構，2004，296；48～49.

○ 伊藤麻里子、五島真理為、木下ゆり、ストロネルケイトリン、阿部しのぶ、塩入康史、大郷宏基、新庄文明、伊藤葉子：AIDS/HIVが実施する若者相互のAIDS啓発—全国調査の分析を通して—。日本エイズ学会総会、2004、日本エイズ学会誌，6(4)；538.

○ 伊藤葉子、五島真理為、伊藤麻里子、木下ゆり、塩入康史、新庄文明：各教育段階における若者相互のAIDS啓発プログラムの効果。日本精神衛生学会創立20周年記念大会(2004、東京)。プログラム・発表抄録集，2004，26.

○ 五島真理為、伊藤麻里子、木下ゆり、塩入康史、伊藤葉子、新庄文明：若者相互のAIDS啓発プログラムと共感に関するワークショップ。日本精神衛生学会創立20周年記念大会(2004、東京)。プログラム・発表抄録集，2004，27.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし